

ロシア語における主語・動詞の一致と 主格の付与をめぐる⁽¹⁾

匹 田 剛

0. はじめに

ロシア語は日本語とは異なり、一致 (agreement) が行われる言語である。この点において、ロシア語は英語と同様の性質を示す言語であると考えられ、

(1) 本稿のグロスで用いた略記は以下の通りである。

NOM. = nominative; именительный падеж; 主格

GEN. = genitive; родительный падеж; 生格

DAT. = dative; дательный падеж; 与格

ACC. = accusative; винительный падеж; 対格

INS. = instrumental; творительный падеж; 造格

LOC. = locative; предложный падеж; 前置格

1. = 1st person; первое лицо; 1 人称

2. = 2nd person; второе лицо; 2 人称

3. = 3rd person; третье лицо; 3 人称

PR. = present; настоящее время; 現在時制

PA. = past; прошедшее время; 過去時制

SG. = singular; единственное число; 単数

PL. = plural; множественное число; 複数

M. = masculine; мужской род; 男性

F. = female; женский род; 女性

N. = neuter; средний род; 中性

ADVPART. = adverbial participle; деепричастие; 副動詞

また、本稿ではグロス中の名詞に付してある性別とそれ以外の、動詞や形容詞に付してある性別とを一切区別せずに付けてあるが、これは便宜上のものである。実際には名詞の性別はその名詞の持つ固有の性別であるのに対して、動詞や形容詞の性別は何らかの名詞句に一致した結果の形であり、そのものが持つ固有の性別ではない。

なお、付してある文法的特徴は議論上必要なもののみであり、全ての語に全ての文法的情報を記してあるわけではない。

Kuroda (1992) が提案している一致に関するパラメーターについて、ロシア語と英語は等しい値を示すと考えられる。しかしながら、ロシア語は Kuroda (1992) が考えているような形での現象の呈し方をせず、このパラメーターの設定をめぐって理論的な問題を投げかけていると考えられる。本稿の第1節ではこの問題を扱う。

また、Chomsky (1981) や Chomsky (1993) など想定されており、生成文法の理論の中で一般に広く受け入れられている一致の定式化に従うと、主語と動詞の一致と主語名詞句に対する主格の付与は1対1に対応する同一の現象の裏と表であると考えられている。しかしながら、ロシア語の例を見る限り、このことは当てはまらなないと考えられる。すなわち、ロシア語は Kuroda (1992) が提案しているようなパラメーターの設定に関してのみならず、生成文法理論が提案している一致の定式化に対して問題を提起するものであると考えられる。この点については第2節で論ずることとする。

1. 一致のパラメーターについて

Kuroda (1992) は日本語と英語の主語と動詞の一致をめぐるいくつかの現象を観察することによって、一致のパラメーター (agreement parameter) を提案している。この提案によれば、各言語は一致が義務的であるか否かについてパラメーター化されていると考えられるが、例えば、英語は一致が義務的な言語であると考えられ、それに対して日本語は一致が義務的ではないと考えられる。

日本語と英語は以下の点で異なる性質を示す。

(1)

- a) 顕在的 wh 移動の有無
- b) 語順のかきまぜの有無
- c) 複数の主語の可否
- d) 冗語的主語の有無

Kuroda (1992) はこれらの性質の違いを上述の一致のパラメーターの値の

違いによって以下に示すように説明づけようとしている。

まず第1に、(a)の顕在的 wh 移動の有無に関して言えば、一致が義務的である英語においては当然 [+wh] の素性を持つ C とその Spec が一致を起こさねばならない。その必要性を満たすために wh 移動が義務的に行われるのである。一方日本語は一致が義務的でないため、そのような移動が起こる必然性は認められない。

第2に、(b)の語順のかきまぜ (scrambling) の有無に関して、日本語は語順が自由な言語であるが、英語はそうではない。この点に関して Kuroda (1992) は一致のパラメーターによって以下のように説明している。日本語などに見られるいわゆるかきまぜ現象は IP の Spec への移動であると考えられるが、英語のような一致が義務的である言語では IP の Spec に入り AGR と一致を起こすのは主語 NP 一つだけということになる。しかし、日本語のように一致が義務的でない言語の場合、このような制限はなく、複数の要素がトピックとしていわゆるかきまぜ規則によって IP の Spec の位置に入ることができる。

第3に、複数の主語の可否について。英語は一致が義務的な言語であるので、AGR と一致を起こすことのできる、すなわち主格を与えることのできる要素は一つだけとなる。それに対して、日本語では一致が義務的ではないので、複数の要素が主格を与えられても差し支えない。

第4に、いわゆる冗語的 (pleonastic) 主語について。英語のような一致が義務的に行われなければならない言語の場合、AGR は必ず何らかの名詞句と一致しなければならない。そのため、*it* や *there* のような冗語的主語の存在が必要となってくる。日本語のような一致が義務的ではない言語においてはそのような必要性は認められないと考えられる。

以上が Kuroda (1992) における一致のパラメーターをめぐって日本語と英語の相違点を説明しようと試みた議論の概略である。それでは英語同様に一致が義務的であると当然考えられるロシア語においてはこの議論は成り立ち得るのであろうか。以下の各節ではそれぞれの特徴についてのロシア語の振る舞いを概観していく。

1. 1. wh 移動

第1に、wh 移動に関してはロシア語は Kuroda (1992) の予想通り、義務的に行うと考えられる。

- (2) Я читаю книгу, которую он
I-NOM. read-PR.1. SG. book-ACC. which-ACC. he-NOM.

мне подарил e_i .
me-DAT. present-PA. M.

「私は彼が私にくれた本を読んでいる。」

- (3) *Я читаю книгу, он мне подарил которую.

- (4) Я хочу знать, кого вы
I-NOM. want-PR.1. SG. know-INF. who-ACC. you-NOM.

любите e_i .
love-PR.2. PL.

「私はあなたが誰を好きなのか知りたい。」

- (5) *Я хочу знать, вы любите кого.

この点に関しては、ロシア語は英語のように wh 移動が義務的に行われ、一致のパラメーターの値によって Kuroda (1992) が予想する振る舞いを見せることがわかる。

ただし、以上のような関係詞節や、間接疑問文などの場合、すなわち従属節の場合ではなく、主節に疑問詞があらわれると、ロシア語の場合、英語のいわゆるエコー疑問文 (echo-question) などよりもはるかに高い頻度で wh 移動が行われないものが見られる。

- (6) Что ты читаешь?
what-ACC. you-NOM. read-PR.2. SG.

「あなたは何を読んでいるのですか？」

- (7) Ты читаешь что?

1. 2. 語順のかきまぜ

ロシア語はいわゆる語順が自由な言語であり、それは日本語以上に自由で

あるとさえ考えられる。例えば、以下のような文には都合、 $4! = 24$ 通りの語順が可能である。

- (8) Таня читает журнал дома.
Tanja-NOM. read-PR.3. SG. magazine-ACC. at home

「ターニャは家で雑誌を読んでいる。」

ロシア語のかきまぜ規則は日本語において Kuroda (1992) が仮定しているのと同様に、INFL の Spec の位置への Chomsky 付加 (Chomsky-adjunction) によるものであると考えられる。(この点については匹田 (1993) を参照のこと。) 従って Kuroda (1992) の考えに従う限り、そして、ロシア語が義務的な一致を持つ言語である限り、このことは矛盾をはらんでいることになる。すなわち、ロシア語のかきまぜ移動が INFL の Spec の位置への移動であると考え、AGR と一致を起こす Spec の位置に複数の要素が存在することになってしまう。これは Kuroda (1992) の議論に従う限り、一致が義務的であるロシア語としては起こってはならないことなのである。

1.3. 複数の主格名詞句

Kuroda (1992) が主張する一致が義務的でない言語の次の特徴は主格主語名詞句が複数あらわれ得るということである。この点に関しては例えば、日本語においては以下の様な例文が考えられる。

- (9) zoo-ga hana-ga nagai

このような複数の主格名詞句を有することができるのは、日本語は一致が義務的ではなく、したがって、INFL の Spec の位置に複数の名詞句があったとしても両者に一致を行う必要がないということから説明ができる、というのが Kuroda (1992) の考えである。当然、一致が義務的な英語においてはこのような構造は不可能であるとされる。

それでは英語同様一致が義務的であると考えられるロシア語にはこのような複数の主格名詞句は見られるのであろうか。ロシア語においては日本語の上述のようなタイプの構文に全く同一のものは見当たらない。しかしながら、複数の主格名詞句を持つものは見られる。まず、第1のものはいわゆる左方

転移化要素 (left-dislocated element) である。

- (10) Мария_i- я ее_i люблю.
 Marija-NOM. I-NOM. her-ACC. love-PR.1. SG.

「私はマリヤを愛している。」

ここでは、対格目的語である *ее* 「彼女」と同一指示になっている主格名詞句 *Мария* が文頭にトピックとしてあらわれている。(この種のトピックについては、匹田 (1993) を参照。)

第2にしばしば見られる主語以外の主格名詞句は、連結動詞 (copula verb) *быть* の主格述語である。

- (11) Он ϕ студент.
 he-NOM. be-PR. student-NOM.

「彼は学生である。」

ここでは、主語のみならず述語名詞句も主格であらわれている。(この主格述語は様々な問題を包含している。その諸問題に関しては匹田 (1994) を参照。)

さらに、いわゆる「呼格 (vocative)」的な名詞句や引用形はロシア語では主格であられる。この様な名詞句を (そして上述の主格述語も) Chomsky (1986) は項 (argument) であるとは考えず、そのためいかなる格も付与されていないと考えているが、ロシア語のような格が顕在的に表示される言語ではそのような議論は当然通用しない。したがって Kuroda (1992) が述べる主格名詞句と同列に扱わざるを得ないと思われる。

1.4. 冗語的主語の有無

Kuroda (1992) では、英語において、例えば以下の例に見るような、いわゆる冗語的主語のようなものが見られるのは、英語が一致を義務的に行うからであると主張されている。

- (12) It seems that John hates Bill.

- (13) There is a book on the table.

そして、日本語に冗語的主語が見られないのは一致が義務的ではないから

であるとされている。

それではロシア語はどうであろうか。ロシア語にはこの様な冗語的主語に相当するものは見当たらない。上の英語の例文の内容と類似のものをロシア語で示すとすれば、例えば以下のような言い方があるが、そこには冗語的要素は当然見られない。

- (14) Кажется, что Иван не любит
seem-PR.3. SG. that Ivan-NOM. not love-PR.3. SG.

Игоря.
Igor'-ACC.

「イワンはイーゴリのことを嫌っているようだ。」

- (15) На столе есть книга.
on table-LOC. be-PR. book-NOM.

「テーブルの上に本がある。」

以上の例はロシア語に冗語的主語が存在しないことを示すためのものであるが、この他にもロシア語には定動詞 (finiteverb) が一致する対象を持たない構文がある。

ロシア語には、英語における3種類の具体的な指示対象を持たない形式主語、すなわち *it*, *they*, *you* を有する構文に意味的・機能的にそれぞれほぼ相当し、形式的にも多くの類似点を見せると考えられる3つの構文が存在する。そしてそれらはいずれも顕在的な主格の主語名詞句は持たず、主語の位置は空のままである。

3つのタイプの構文の第1のものは無人称文 (безличное предложение) と呼ばれるものであり、英語の形式主語 *it* を持つ構文に相当するものであるが、英語の *it* にあたるものが無く、顕在的な主格主語は見られない。そのかわり、この構文であることを示すのは動詞が3人称・単数・中性の形を持つことである⁽²⁾。

(2) 現在時制では3人称・単数、過去時制では中性を示す。

- (16) На улице стало темно.
on street-LOC. become-PA. N. dark-N.

「外は暗くなった。」

この構文は東郷他 (1978: 627) によれば「主語が存在せず、また存在し得ない文」とされ、英語の形式主語 *it* を有する構文とほぼ意味的・機能的には近いことがわかる⁽³⁾。

第2のタイプは不定人称文 (неопределенно-личное предложение) と呼ばれるものである。これは上述の東郷他 (1978: 627) によれば「主要な注意が行為だけに向けられ、その行為の主体は不明か、あるいは問題にしていない文で、形の上では主語を欠き、述語動詞が3人称複数(過去形では複数)になっている文」のことであり、英語の形式主語 *they* を持つ文にほぼ相当すると考えられる。ここでもやはり顕在的な主格主語は見られない。動詞は3人称・複数の形態を示す。例えば以下のようなものがある。

- (17) В киоске продают газеты.
in kiosk-LOC. sell-PR.3. PL. newspaper-PL. ACC.

「キオスクでは新聞を売っている。」

第3のものは一般人称文 (обобщенно-личное предложение) と呼ばれるものである。これは東郷他 (1978: 627) では以下のように説明している：「述語

(3) しかしながら、ロシア語の無人称文は英語の形式主語 *it* を持つ構文よりも広い使われ方をする事に注意しなければならない。例えば、自然の威力を表現する以下のような文も可能である。

- (i) Реку сковало льдом.
river-ACC. freeze-PA. N. ice-INS.

「川には氷がはった。」

このような場合、以下のような *лед* 「氷」を主格の主語としてとる文とは意味的に少々の違いがでる。詳しくは東郷他 (1978) などを参照。

- (ii) Лед сковал реку.
ice-NOM. M. freeze-PA. M. river-ACC.

他にも存在の否定を表すものなどいくつかのタイプがあるが、いずれも東郷他 (1978) などの参照文法に詳しい記述がある。

動詞が誰にでも当てはまる行為を意味しているような文で、一般的な心理を表している様な文を一般人称文という。」この場合も顕在的な主格主語は無く、動詞は2人称・単数の形態を示す。

- (18) Не изведав горького, не
not experience-ADVPART. PA. bitter-GEN. not
узнаешь сладкого.
know-PR.2. SG. sweet-GEN.

「苦いものを知らずに、甘いものはわからない。」

以上のように、ロシア語は義務的な一致を有する言語であるにも関わらず、英語のような冗語的主語は原則としてあらわれない。さらにその他にも英語のいわゆる形式主語にあたるものもあらわれることがなく、それらの構文では定動詞が義務的に一致するべきものが存在しないのである。

以上、Kuroda (1992) が主張する一致のパラメーターとその値によって決定される個々の性質をロシア語に関して見た。その結果は以下のとおりである。

(19)	Eng.	Jap.	Rus.
wh 移動	+	—	+
かきまぜ	—	+	+
複数主格	—	+	+
冗語的主語	+	—	—

この様に、ロシア語は Kuroda (1992) で提案されているパラメーターに従うならば義務的な一致を持つ言語であると考えられるが、彼が主張する義務的一致を有する言語の性質を示しているとはおよそ言いがたい。このことから一致のパラメーターそのものを考え直すか、彼が依拠している一致のメカニズムを考え直すかをしなければならないことをロシア語の例が示していると言えよう。

また、これらの特徴のうちかきまぜの可否や形式主語の有無は一致をめぐる問題と言うよりはむしろ、ロシア語や日本語のような言語が豊かな形態法

の体系を有していることに関係していると考えの方が自然なのではないか。例えば、日本語もロシア語も明示的に格を表示する言語であるが故に語順によって文法関係を示す必要がなく、従って語順が「自由」になると考えられる。(Hikita (1992) では格の顕在的な表示がロシア語のような言語においてさえもかきまぜの可能性に大きく影響を与える場合があることを示した。) Kuroda (1992) の議論は英語と日本語だけを観察してあまりにも多くのことを論じ、結び付けていると考えざるを得ないのである。

2. 一致と主格の付与の定式化について

前節では Kuroda (1992) の提案する一致のパラメーターについてロシア語の観点からその問題点を指摘した。本節では一致のパラメーターの持つ問題点の他に、ロシア語の主格の付与の問題と併せて見ると、現在の生成文法理論において想定されている主語と動詞の一致の方法そのものにも問題点が含まれていることが明らかになることを論じる。

本論に入る前に、生成文法における主語と動詞の一致の定式化の方法の2つの大きな流れを概観してみたい。

第1のものは Chomsky (1981) において論じられているような統率 (government) を用いた方法である。Chomsky (1981) での考え方は以下の定義に表現されていると考えられる：

(20) AGR is coindexed with the NP it governs.

(Chomsky 1981 : 211)

すなわち、主語と動詞が一致を起こすための要素 AGR はそれが統率する名詞句と一致を起こすと考えられている。そして、その一方で主格の付与は以下のように定義されている：

(21) NP is nominative if governed by AGR. (Chomsky 1981 : 170)

これらの定義から明らかなように、Chomsky (1981) における考え方において、すなわちいわゆる GB 理論において、主語と動詞の一致と主語名詞句に対する主格の付与は1対1に対応していると考えられている。別の表現を

用いるとすれば、GB 理論において一致と主格付与は同一のコインの裏表と考えられていると言えよう。

次に生成文法理論におけるより最近の考え方、いわゆる Minimalist Program における考え方を概観する。Chomsky (1993) では統率を用いた主語と動詞の一致の定式化は行われていない。そこでは全てが Spec-head の関係によって処理されている。すなわち、AGR の Spec の位置にある主語名詞句は AGR と同一指標となり、その際、AGR に Chomsky 付加された T によって主格を付与される。ここで重要なことは、Chomsky (1981) での考え方同様、主語と動詞の一致と主格の付与は同一のコインの裏表であると考えられているということである。このことは Chomsky (1993: 7) に “We now regard both agreement and structural Case as manifestations of the Spec-head relation.” という言葉があることから明かである。

以上のように、生成文法の理論の流れの中で主語と動詞の一致は Chomsky (1981) から現在まで主格の付与と同一のプロセスの中で処理されてきた。しかしながら、ロシア語のデータを観察すると、この一般理論の方向性には問題点があることがわかる。以下、各節では一致と主格付与を同一視する現在の方向性に問題を投げかけるロシア語におけるデータを紹介し、論を進めていく。

2.1. ロシア語の一致が示す問題

ロシア語は定動詞が一致を起こし何らかの形態的な表示を行わなければならない言語である。それは原則として主格主語と一致を起こすのであるから、生成文法の理論において考えられているように AGR による主格の付与と一致は同じプロセスであると考えられることも可能であるのかもしれない。しかしながら、ロシア語の主語と動詞の一致をより詳細に観察するとそこには現在の理論的定式化では説明のつかないことが見られることがわかる。本節では主語と動詞の一致が主格の付与と同一のプロセスの裏表に過ぎず一対一の関係にあるという現在の理論的定式化が不十分なものであるということを以下の各節でロシア語のデータを示すことにより論じる。

2.1.1. 等位接続構造

ロシア語において一致の理論に問題を投げかける一つめのものはいわゆる等位接続構造である。Розенталь(1984)では以下のような例文を示している：

- (22) Зима, весна и дождливое
winter-SG. F. spring-SG. F. and rainy-SG. M.

лето прошли в боях.
summer-SG. M. pass-PA. PL. in battle-LOC.

「冬，春，そして雨がちの夏が戦いの中で過ぎ去った。」

- (23) Пропала контурность, выпуклость
disappear-PA. SG. F. contour-SG. F. clearness-SG. F.

земных предметов.
earthly-GEN. PL. object-GEN. PL.

「地上にあるものの輪郭と明瞭さが消失した。」

ここで、主格主語としてあらわれているのはそれぞれ [_{NP} зима, весна и дождливое лето] と [_{NP} контурность, выпуклость земных предметов] であるが、いずれの場合も単数形の名詞句が複数等位接続されているものである。そして動詞は(22)では複数形を示し(23)では単数形を示している。問題となるのは例文(23)である。もし仮に動詞が一致を起こしているのが隣接する контурность “contour” であるとしたら、一致と主格の付与を一対一に対応すると考える生成理論では выпуклость “clearness” に主格の付与を行うことができなくなってしまう。当然これは格理論によって排除されるばかりか、全ての名詞句が明示的な格表示を持たなければならないロシア語の形態法にも違反することになる⁽⁴⁾。

(4) 等位接続構造が一致に関してこのような複数の可能性を引き起こすのは主語と動詞の一致の場合のみではない。例えば以下のものは等位接続構造を有する名詞句を形容詞が修飾している場合であるが、ここで形容詞は単数形と複数形が両方可能である。

2.1.2. 連結動詞構文

ロシア語の連結動詞は述語名詞句として二通りの形態をとりうる。すなわち、造格 (instrumental case) 名詞句と主格名詞句である。

- (24) Таня была студенткой.
Tanja-NOM. be-PA. F. student-INS.

「ターニャは学生だった。」

- (25) Мой брат был моряк.
my-NOM. M. brother-NOM. be-PA. M. seaman-NOM.

「私の兄は船員だった。」

ここで問題となるのは主格名詞句を述語としてとった場合である。この様な場合、動詞が一致を示しているのは当然一つの名詞句であるにも関わらず実際には主語と述語という二つの名詞句に主格が付与されている。これはもちろん現在の一致理論では説明が付けられない現象である。

また、Chomsky (1986) はこのような述語名詞句は項でないため格を付与される必要はないと論じているが、ロシア語では全ての名詞句が明示的に格を表示しなければならないためこの様な議論は受け入れ難い。さらに、匹田 (1994) で示したようにこの種の述語名詞句はただ単に形態的に主格を示しているのみならずいくつかの点で主語的な性質を示している。例えば：

-
- (i) новый/ новые [журнал и книга]
new-SG./-PL. magazine and book
「新しい雑誌と本」

また、次の例は逆に1つの名詞を等位接続構造を有する形容詞句が修飾している場合であるが、この場合主要部名詞は単数形と複数形が可能である。

- (ii) в правой и левой руке/ руках
in right-SG. and left-SG. hand-LOC. SG./-LOC. PL.
「右手と左手に」

もちろん、これらの一致の複数の可能性には様々な意味的・機能的制約、あるいは傾向が存在するが、本稿はあくまでも言語の形式的側面を論じるのが目的であるのでここではそれには触れない。詳しくは Кохтев и Розенталь (1984), Розенталь (1984, 1994) などを参照。

- (26) Это была школа.
this-NOM. N. be-PA. F. school-NOM. F.

「これは学校だった。」

この様に主格主語が指示代名詞 *это* “this” である場合、動詞は強制的に主格述語名詞句に一致しなければならない。さらに、主格述語との一致はこの様に主語が *это* という「特殊な」語彙項目である場合以外にも起こり得る。以下の例は АН СССР (1970: 555) からのものである。

- (27) Его спокойствие было/была личина.
his calmness-NOM. N. be-PA. N./F. pretense-NOM. F.

「彼の平静さは見せかけだった。」

- (28) Кабинет был/была большая комната.
office-NOM. M. be-PA. M./F. big-NOM. F. room-NOM. F.

「そのオフィスは大きな部屋だった。」

ただし、このような現象は義務的なものではなく、АН СССР (1970) や Barnetová (1979) などによればあくまでも話者によってみられることもある「ゆれ」に過ぎないと考えられる。しかしながら、このタイプの主格述語名詞句がそれなりの主語的な特徴を持ち、「項ではない」と簡単に切り捨てる訳にはいかないことを示していると思われる⁽⁵⁾。

2. 1. 3. *кто* との一致

ロシア語の疑問代名詞 *кто* “who” やそれから派生される不定代名詞 *кто-нибудь* “someone” などは原則として男性名詞であり、動詞などの一致は男性・単数として行われる。

- (29) Кто шумит?
who-NOM. make a noise-PR. 3. SG.

「騒いでいるのは誰だ？」

(5) この他にも主格述語名詞句の持つ主語的な性質はあるがここでは触れないこととする。詳しくは匹田 (1994) を参照。

- (30) Кто-нибудь знал об этом?
 someone-NOM. know-PA. M. SG. about this-LOC.

「誰かこのことについて知っていましたか？」

しかし、この *кто* が明らかに複数の人物を指示していると考えられる場合、例えば関係詞として用いられた場合に複数形の名詞を先行詞としてとった場合などに、単数・男性形と複数形の間に揺れが観察されることがある。

(例は АН СССР (1980) から。)

- (31) Те, кто жили, любили, мучились...
 those-NOM. who live-PA. PL. love-PA. PL. feel pain-PA. PL.

「生き、愛し、苦しんだ人たち。」⁽⁶⁾

- (32) (Я воспользовался этим, чтобы произнести вам свою речь...)

(私はあなた方に自分の話をするためにこれを利用した……)

всем, кто высунул наружу
 all-PL. DAT. who-NOM. stick-PA. M. SG. out

головы и слушают мой
 head-PL. ACC. and listen-PR.3. PL. my-SG. M. ACC.

прочный голос
 firm-SG. M. ACC. voice-SG. M. ACC.

「外に首を突き出して私の確固たる声を聞いている全ての人々に(話をするために)」

例文(31)では従属節の主格主語 *кто* が文法的には単数・男性の素性を有しているにも関わらず事実上それが複数の対象を指示していることから従属節の動詞が全て複数形を示している。また、同様に例文(32)では従属節の主格主語

(6) ここで用いられている *те* は文法的素性を示すために利用されるいわゆるダミーの先行詞であり、この場合は複数であることと、主文の中での格を示している(この場合は主格)。*те*、*кто* 全体で英語の *those who* の様な機能を果たしていると考えればよい。

кто が文法的には単数・男性、指示対象としては複数という二つの性質が衝突を起し、従属節の二つの動詞のうち一つめの *высунул* は単数・男性形、二つめの *слушают* は複数形を示すということが起こっている。

また、АН СССР (1980) によれば、以上のような例は単数・男性形と複数形の間に揺れがみられ、(31)と(32)はそれぞれ以下に示す(31)', (32)' のような形も可能である。

- (31)' Те, кто жил, любил,
those-NOM. who live-PA. SG. M. love-PA. SG. M.

мучился...
feel pain-PA. SG. M.

「生き、愛し、苦しんだ人たち。」

- (32)' всем, кто высунули наружу
all-PL. DAT. who-NOM. stick-PA. PL. out

головы и слушает мой
head-PL. ACC. and listen-PR.3. SG. my-SG. M. ACC.

прочный голос
firm-SG. M. ACC. voice-SG. M. ACC.

「外に首を突き出して私の確固たる声を聞いている全ての人々に(話を
するために)」

以上のような例では、主格主語 *кто* とそれと一致しているはずの動詞が場合によってはその一致が起らなくてもかまわないことを示している。しかし、そうすると一致を起す名詞句に AGR が主格を与えるという 1 対 1 の関係を想定している現在の理論的な枠組みではこの問題は説明がつかなくなるのである。

2. 1. 4. 数量詞を伴った名詞句

本節での主題に入る前に、簡単にロシア語の数詞の体系とそれによって修飾される名詞の形態について概観する。

ロシア語において 1 から 20 は英語と同様一つの語からなる基本個数詞で

ある。それ以上になると 20+1, 30+3 というように二つ以上の基本個数詞を組み合わせることによってできる合成数詞によって表現される。これも英語と全く同じといってよい。例えば、以下の数詞の例を見ていただきたい。

(33) ロシア語の数詞 (例)

1 = один, 2 = два, 3 = три……

10 = десять, 11 = одиннадцать, 12 = двенадцать……

20 = двадцать, 21 = двадцать один……

30 = тридцать, 32 = тридцать два……

……………

これらの数詞が名詞を修飾する場合、ロシア語は英語と異なる様相を呈しはじめる。基本数詞の場合、「1」によって修飾される名詞は単数主格形を示す（ただし、名詞句全体が主格以外の格を有する場合はその格形を示す）。

- (34) один карандаш
one pencil-SG. NOM.

「1本の鉛筆」

2～4の基本個数詞によって修飾される場合、その名詞は単数生格形を示す。

- (35) два карандаша
two pencil-SG. GEN.

「2本の鉛筆」

- (36) три карандаша
three pencil-SG. GEN.

「3本の鉛筆」

5以上の基本個数詞によって修飾される場合はその名詞は複数生格形を示す。

- (37) пять карандашей
five pencil-PL. GEN.

「5本の鉛筆」

- (38) двадцать карандашей
twenty pencil-PL. GEN.

「20 本の鉛筆」

- (39) тридцать карандашей
thirty pencil-PL. GEN.

「30 本の鉛筆」

合成数詞の場合、修飾される名詞は修飾する合成数詞の「下 1 桁」の基本数詞によって上の規則に従った形になる。

- (40) двадцать один карандаш
twenty one pencil-SG. NOM.

「21 本の鉛筆」

- (41) двадцать два карандаша
twenty two pencil-SG. GEN.

「22 本の鉛筆」

- (42) двадцать пять карандашей
twenty five pencil-PL. GEN.

「25 本の鉛筆」

- (43) сто сорок один карандаш
hundred forty one pencil-SG. NOM.

「141 本の鉛筆」

以上がロシア語の数詞とそれによって修飾される名詞に関する簡単な概略であるが⁽⁷⁾、ここで問題となるのは被修飾名詞が主格を示さない場合である。

個数詞によって限定された名詞句の主要部名詞が主格形を示さない場合、意味的な観点から見ればこの名詞句は複数の素性を持つと考えられ、それ故この名詞句を主語として持つ動詞は複数形を示すことが予想される。しかし、

(7) より詳しく、あるいは正確には様々な参照文法、あるいは Corbett (1978) などを参照されたし。

形態的に見ればこれらは主格を示しておらず、従って主語とは認定されない。それ故その場合、動詞の形態は最も中立的な形態であると考えられる単数中性形を示す⁽⁸⁾。そして、実際に数詞によって限定された名詞句を主語として持つ文では動詞の形態に揺れが見られるのである。(例は АН СССР (1980) から。)

- (44) Горело/ горели две лампы.
burn-PA. SG. N./-PA. PL. two lamp-SG. GEN.

「二つのランプが点っていた。」⁽⁹⁾

- (45) Скакало/ скакали семнадцать всадников
run-PA.SG.N./-PA. PL. seventeen horseman-PL. GEN.

「17人の騎士が馬で走っていた。」

ここで動詞が複数形を示している場合、一致は行ってもそれと同一の指標を有し主格の付与を受けた名詞句が存在しない。また単数中性形を示した場合も、動詞の形態を定めたもののそれと同一指標を持ち主格を付与された名詞句はどこにも存在しない。いずれの場合でも現在の一致の理論の下では矛盾が生じることになる。

また、数詞以外にも修飾を受けた名詞に複数主格形を要求するものがあり、その場合も同様の矛盾をはらんでいる。

- (46) Двое учеников пришло/ пришли.
two pupil-PL. GEN. come-PA. SG. N./-PA. PL.

「2人の生徒がやってきた。」 (АН СССР 1980)

- (47) Несколько столов стояло в комнате.
some table-PL. GEN. stand-PA. SG. N. in room-LOC.

「いくつかのテーブルが部屋の中にあった。」

(Кохтев и Розенталь 1984)

(8) 前節の無人称文も参照。

(9) две は два の女性形である。

- (48) Несколько человек шли по улице.
 some man-PL. GEN. go-PA. PL. along street-DAT.

「何人かの人が町を歩いていた。」 (Кохтев и Розенталь 1984)

(46)は集合数詞 *двое* によって修飾されている場合であり, (47-48) は不定数量詞 *несколько* “some” によって修飾されている名詞句を主語に持った動詞がそれぞれ単数・中性形と複数形を示している例である。

これらの例はいずれも主格付与と主語・動詞の一致に 1 対 1 の対応関係を想定している一致の理論に問題を投げかけているものであると思われる。

2. 1. 5. 主格主語を持たない節

前節でも示した様に, ロシア語には英語の形式主語にあたるものが存在せず, その場合, 主語は示さない。前節で挙げた例をここでも示そう。

(49)(=16)

На улице стало темно.
 on street-LOC. become-PA. N. dark-N.

「外は暗くなった。」

(50)(=17)

В киоске продают газеты.
 in kiosk-LOC. sell-PR.3. PL. newspaper-PL. ACC.

「キオスクでは新聞を売っている。」

(51)(=18)

Не изведав горького,
 not experience-ADVPART. PA. bitter-GEN.

не узнаешь сладкого.
 not know-PR.2. SG. sweet-GEN.

「苦いものを知らずに, 甘いものはわからない。」

前節ではこれらの例文を一致のパラメーターの観点から見たが, これらの現象は一致のシステムそのものにも問題を投げかけていると考えられる。すなわち, これらの文では動詞の形式が決定しているにも関わらず, 何らかの

名詞句に対する主格の付与が行われていない。これは当然主格の付与と一致が同一のプロセスであると考え理論からみると矛盾していると考えられる⁽¹⁰⁾。

2.1.6. その他の一致と対応していない主格名詞句

その他にもロシア語には一致と無関係に主格を付与されている名詞句が存在する。まず第1のものは前節でも触れたいいわゆる左方転移化要素である。

(52)(=10)

Мария₁- я ее₁ люблю.
Marija-NOM. I-NOM. she-ACC. love-PR.1. SG.

「マリヤは私が愛している。」

この場合、一般理論に従えば AGR による主格の付与は動詞の形態によって明らかなように主格主語 я に対して行われていると考えられる。そうすると左方転移化要素 Мария に対する格付与は行われなことになる矛盾が生じてしまう。

さらにいわゆる「呼格」の名詞句と引用形の名詞句も同様な問題を投げかけている。いずれもいかなる要素にも一致を要求しないにも関わらず、しながら主格を付与されている。この問題は一致と主格付与を同一視している以上解決されることは無いであろう。

Chomsky (1986) はこれらの左方転移化要素、「呼格」名詞句、引用形は前述の連結動詞の述語名詞句同様に項でないので格を付与される必要はないと論じているが、英語のような顕在的な格形を持たず抽象格のレベルで議論が終始するような言語は別として、ロシア語のような全ての抽象格が同時に具

(10) なお、形態的な表示法が豊かなロシア語はいわゆる Pro-drop language 的な性質を示し、しばしば主語代名詞が省略される。しかしながら、この場合の主格主語があらわれていないことと省略による主格主語が見えないことは別の現象であることに注意しなければならない。これらの構文における主語は本来的に存在していないものであり、「省略しなくても」顕在的に表現されることは不可能なのである。

体的な音形を持った具体的な格である言語ではこの議論は認め難い。

2.2. 一致と主格付与：その分離の必要性

以上、本節で示したことは様々な例において、主格の付与と主語と動詞の一致の間に「ずれ」が見られるということであった。現在の一致を説明するための理論ではこの様なロシア語における「ずれ」は説明することができない。

ロシア語のような言語を見る限り、主語と動詞の一致と主格の付与は別個の過程であると考えざるを得ないと思われる。ここでは正確な一致と主格付与の定式化を行うことは避けるが、Babby (1986: 210) はロシア語に関してその主格付与の定式化を一般に広く行われているものとは異なった方法で提案しており、ここでの議論と関係併せて興味深い。

(53) Nominative Case Assignment

A noun phrase that is not governed by a lexical category is assigned the nominative case.

Babby 自身はこの様な主格付与の定式化は主語の他に（上述のような）左方転移化要素、「呼格」名詞句、引用形などの説明も可能にする、と述べるにとどまり、この様な定式化に対する理由は詳細に述べることは避けているが、本節で論じたような等位接続名詞句が主語となっている場合、連結動詞の主格述語、代名詞 *кто* が主語になっている場合、数量詞によって修飾された名詞句が主語となっている場合、主格主語を持たない節などに見られる主語と動詞の一致と主格付与の間に見られる「ズレ」を説明する為に、この様な一致と格付与を分離した形での定式化は大きな興味の対象となる。

3. まとめ

以上、本稿ではロシア語の主語・動詞の一致と主格付与に関する例を見ることによって、生成文法理論の流れの中での両者の定式化に見られる問題を論じた。

第1節では Kuroda (1992) が提案している一致のパラメーターの問題を考

察した。ロシア語はこのパラメーターに関しては義務的な一致を持つ言語であると考えられるが、Kuroda (1992) が主張するこの値から帰結される諸特徴の多くをロシア語は示さないことが明らかになった。

第2節では現在の生成文法理論が主語・動詞の一致と主格の付与を同一のプロセスとして扱っていることについて議論を加え、一致と主格の付与は全く別個の過程として処理しなければならないことをロシア語の観点から論じた。

参考文献

- Babby, L. H. (1986) "The Locus of Case Assignment and the Direction of Percolation: Case Theory and Russian", in R. D. Brecht and J. S. Levine (eds.) *Case in Slavic*, Slavica.
- Barnetová, V. et al. (1979) *Русская грамматика*, 2 vol., Academia, Praha.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*, Praeger.
- (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory", in K. Hale and S. J. Keyser (eds.) *The View from Building 20*, The MIT Press.
- Corbett, G. G. (1978) "Numerous Squishes and Squishy Numerals in Slavonic", in B. Comrie (ed.) *Classification of Grammatical Categories*, Edmonton.
- Hikita, G. (1992) "Extraposition of Elements Out of Some Syntactic Categories in Russian", *Gengo Kenkyu*, vol.102.
- Kuroda, S.-Y. (1992) *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, Studies in Natural Language and Linguistic Theory, vol.27, Kluwer.
- АН СССР (1970) *Грамматика современного русского литературного*

языка, Наука, Москва.

——(1980) *Русская грамматика*, в 2 тт., Наука, Москва.

Кохтев, Н. Н. и Д. Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка*, Русский язык, Москва.

Розенталь, Д. Э. (ред.) (1984) *Современный русский язык*, Высшая школа, Москва.

——(1994) *Русский язык*, Издательство МГУ.

東郷正延他編 (1978) 『ロシア・ソビエトハンドブック』, 三省堂。

匹田 剛(1993) 「ロシア語における2つの統語的トピックについて」, 『小樽商科大学人文研究』, 第86輯。

——(1994) 「連結動詞 *быть* の主格述語名詞句についての覚え書き」, *Language Studies*, 第2号, 小樽商科大学言語センター。